



T e t s u r o O h t a

おおた てつろう/1949年生。東京電機大学精密機械工学科卒。1973年英国ガスコイン社勤務。1974年松下電器産業株式会社(現パナソニック株式会社)入社。1978年オリオン機械株式会社入社。製造部門やサービス部門でものづくりを経験後、仙台営業所所長、営業本部長などを経て、1991年より現職。同社は国産初の搾乳機やドライポンプの開発を手がけるなど、卓越した技術力で業界に知られるが、太田社長はワクワクするような社風を築くことこそ「感動を呼ぶ製品づくり」につながると語る。

試行錯誤の末に 国産初の搾乳機開発に成功

当社は戦後間もなく、金属切削加工を行う会社として、父(創業者・太田三郎氏)が起業しました。様々な下請けをすることで会社の基礎をつくりましたが、技術の向上に伴って、付加価値の高い自社ブランド製品を世に送り出したいという気持ちが膨らみ、それが結実したのが、1956(昭和31)年に発売した国産初の搾乳機(ミルカー)です。

当時は酪農の大規模化で、重労働である搾乳の人手不足が課題でした。しかし、人手不足を補う搾乳機は高価な外国製しかなく、導入できる酪農家のごくわずか。外国製に劣らない品質の機械を安く手に入れたい

という酪農家の要望は切実で、これに応えるために当社が開発に着手したのです。ただ、搾乳機は乳牛に直接装着するものですから、機能として十分であるだけではなく、医療機器のような繊細さが必要です。開発にあたり、酪農家からお借りした輸入品の搾乳機を分解し、部品を一つひとつ根気よくスケッチしながら試作を重ねていきました。そこに下請けで培った製造技術を駆使して、自社ブランドの搾乳機の1号機が出来上がったのです。

お客様のニーズに応える新しい技術に挑戦するという強い思いが良い結果につながった搾乳機の成功事例は、お客様の声を真摯に聴き、満足度の高い製品をつくる姿勢として、今日に至るまで当社の製品開発の要となっています。

お客様の期待を超える サービスを提供するには

当社のサービス体制の特長は、密接な部門間連携にあります。開発・生産・営業・サービスが一つのサイクルで密に連動しています。これは「お客様の声を聴く」という姿勢のもとに、フレキシブルで効率的なサービス体制を追求していく中で確立したものです。時と場合に応じてユニークな組織をつくることもあります。例えば、開発部門が自信を持ってすすめる新製品開発に関しては、全国から選抜した優秀な営業マン数名を専任担当とし、意見を交わしながら、ともに製品づくりを行います。あるいは、新入社員を配属前に1カ月販売会社に派遣して、酪農家の生の声を聴く機会を設けるなど、入社時から製造、営業等の部門間の垣根をなくすようにしています。

また、当社では営業職であっても全員サービス技能士の資格を取り、客先で機器のメンテナンスができるようにしています。お客様にとっては一分一秒が勝負ですから、機器修理ができない営業マンでは役に立たないのです。お客様が望む一歩先を行くことがサービスの真髄です。

さらには、生産現場の技能向上も重要です。製品をつくり上げるには、金属同士を接合する「ろう付け」や、銅管を複雑な形状に加工するなど、高い技能が必要です。当社では技能五輪全国大会(満23歳以下の技能レベルの日本一を競う技能競技大会)など、生産現場の技能向上に向け、積極的に参加しています。

ベテランが若手を指導していく中で「教えて学んで、学んで教える」風土が育まれ、挑戦から7年目で念願の金メダルを獲得することができました。また近年では、女性社員が銀賞を獲得するなど、性別にかかわらず技能が向上している手応えを感じてい

ます。多数の人員確保よりも、一人ひとりのスキルを上げることがお客様へのサービス充実につながるのだと思っています。

アクションを起こせる ワクワク感を持った会社に

社長就任後、特に力を入れて推し進めたのは社内組織の活性化とシステムの合理化です。ISOマネジメントシステムを導入し、各役職の役割と権限についても見直しをはかりました。重要視したのは自発的に考え行動する人材を育てることです。自ら考えるところから創造性が生まれ、議論が発展し、コミュニケーションが活発になります。

1973年の第1次オイルショックを経験し、仕事をする上でいかにモチベーションが大切かを感じました。それゆえ今の私の大きな役目は、社員のモチベーションを高め、日々ワクワクしながら仕事に取り組める風土を醸成することだと思っています。

個々の製品は、マーケットも違えば売上目標やアプローチも異なります。目標を定め、そこへ向かうためには何が必要なのか、何が足りないのか、それを自発的に考え、進言するチームが出来上がるのが理想です。そういう意味では、東日本大震災の時に幹部が各部署と連携しながら、またたく間に物資やトラックを手配し、物資を運んだことがあり、私の指示がなくても、適確に判断し行動できる人材が育っていることを非常に誇りに思いました。

これからもワクワク感を大切に、社員がアクションを起こせる環境を整えていくつもりです。



チラーの製造工程(本社工場)



赤沼正信 信越支部長(オリオンシステム株)と社員とともに

独自の製品開発力で 世界 No.1 をめざす

当社は搾乳機の発売を契機として、酪農に関係する多様な製品開発を展開してきました。複合的な視点や繊細な技術が求められる酪農機器を最初に手がけたことは、その後の製品拡大をはかる上で大きなメリットとなりました。

酪農機械で培った技術が、産業機械のエアードライヤー、チラー、ジェットヒーターに活かされています。現在、産業機械は、売上の80%を占めるまでになっており、最近ではヒートポンプ技術を取り入れた精密空調機やオイルフリー真空ポンプなど、省エネルギー率の高い製品が大きな評判を呼んでいます。

こうした自社の技術に誇りを持ち、たゆまぬ努力を続けるために「世界No.1製品をめざす」というテーマを掲げています。1980年には、世界で初めて搾乳ロボットの開発に着手しました。残念ながら、この時は実用化に至らなかったのですが、1990年代に農業・生物系特定産業技術研究機構と共同で研究を再開し、2003年には「搾乳ユニット自動搬送装置(キャリロボ)の開発」が社団法人中央畜産会主催の畜産大賞にて優秀賞を受賞しました。また、2004年より信州大学工学部と包括的連携協定を

〈座右の銘〉

知行合一

(ちこうごういつ)

中国の王陽明が唱え、知(認識)と行(実践)は表裏一体だとする説。知識を身につけるだけではなく、実際に行動することで、真に知ることができる。

締結し、産学連携による共同研究や人材交流も進行中です。

真似のできない独自の製品を開発するというチャレンジ精神が、当社の持ち味の一つであり、海外展開も推し進めています。1990年代よりアジアを中心に現地法人を設立していますが、故障の少ない、信頼性の高い機器は、多少高価であっても評価を頂いております。今後も現地企業とのコラボレーションを進め、柔軟な発想で、マーケットと製品の可能性を探っていきます。

そして、国内でもアプローチを変えた戦略を展開していくつもりです。例えば、情報通信企業とコラボレーションし、IoTによる遠隔設備監視システムの導入により、情報共有によって、今以上に迅速な顧客サービスも可能になるでしょうし、ポテンシャルティは非常に高いと考えています。

company profile

オリオン機械株式会社
●所在地：〒382-8502
長野県須坂市大字幸高 246
●TEL：026-245-1230(代)
<http://www.orionkikai.co.jp>
●設立：1946(昭和21)年
●資本金：1億円
●売上高：428億円(2016年3月期連結)
●従業員数：1,900名(2016年3月期連結)
●グループ会社：[国内(20社)] 販売会社10社(北海道オリオン株、東北オリオン株、中央オリオン株、東日本オリオン株、中部オリオン株、関西オリオン株、西日本オリオン株、ほか3社) 生産会社5社、オリオンシステム株他4社
[海外(7社)] タイ、中国、香港、台湾